思い出さがし

Caramelfoxy

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出さがし

【Ｎコード】

Ｎ８８８５ＣＪ

【作者名】

Ｃａｒａｍｅｌｆｏｘｙ

【あらすじ】

６人の人々がそれぞれ「思い出」を探す話。

記憶

僕がほしかったリストバンドが「グロン」という懸賞サイトから届いたんだ。
そのリストバンドは日本内に６個しかない貴重なリストバンドであって、
リストバンドマニアならのどから手が出るほどの品だ。
最初は出回っている偽物だと思ったんだよ。
だけど調べているうちに本物だとわかったんだ。
こんなものが届くなんて嬉しいね。
さっそく今日リストバンドを付けて町に出かけよう。
そのリストバンドをつけた瞬間、
僕の記憶は一気になくなってしまった。

記憶が欠ける

記憶が欠けたという表現はおかしいと思うがまさに今、その状態だ。
僕の名前は？高峰隆介だ。ここは？僕の家だ。僕の年齢は？２０歳。
何をやっている？プログラマーだ。好きなものはリストバンド。
いろいろと自問自答してみても基本的な情報は覚えている。仕事の内容もだ。
そして、もちろんプログラミング用語についてもだ。
しかし、違和感。
何かが欠けているような違和感を感じる。
思い出そうとしていても思いだせないものがね。
そしてそれが欠けてしまった理由だ。
記憶が欠けてしまった理由もわからない。
とりあえず自分の部屋で唸っていてもしょうがないので
僕は外に出ることにした。
外はいい。
しかし仕事を思い出してしまったのでそう長くはいられなかった。
アパートに戻るとポストに封筒が届いていた。
宛名は「グロン」
そこには分厚い説明書が入っていた。
僕は意味が分からなかった。

記憶が欠ける2

グロン？？？
僕にリストバンドを送ってきた人か、それは覚えているぞ。
さっそく僕はその封筒の中身を取り出した。
そこには
「思い出さがしリストバンド　取扱説明書」
という表紙がある一つの本だった。
そう、この取扱説明書は書店にある小説並みの厚さがある。
表紙をめくるとポップな狐の絵が出てくる。
それはさておき僕はすぐに「こんにちは」という項目ページをめくる。
真面目に読んでみて分かったのだがこの冊子の半分はグロンによるイラストシリーズらしい。くだらない。
さて、本題。
「こんにちは、僕はグロン。先日は僕の発売していたリストバンドを買ってくれてありがとう。
結構なプレミア品だし凝ってるから大切にしてくれるとうれしいな。ま、君たちが条件をクリアしない限りはずっと大切につけてくれると思うけどね。ふふふ。
ふふ、僕はそのリストバンドに細工を施したのさ。
君たちのすごーくすごーく大事な人に関する思い出をねっ
消してしまうという細工をさっ
ほら、リストバンドつけた瞬間一瞬意識が飛んで
記憶が欠けたような気がしたでしょう？
でも自分の名前は覚えているしいろいろ覚えているから何も変わっていない風に
おもったでしょでしょ？
でも残念ながら君の思う一番大事な人に対する思い出はすべて飛ん

でまーす！
それに関する記憶も全部飛んでまーす！
なのでその大事な人おかげで勉強ができるようになったとか
その人のおかげで携わったものは全部消えちゃっているわけです。
それも記憶だからね
そこのところよろしくー」
ここまで読んでも意味がわからなかった

取扱説明書まとめ

とにかく頭は混乱していたが、僕はそのリストバンドの取扱説明書を読み進めた。

ここまでのことをまとめるとこうなる。

このリストバンドはいかなることをしても壊れない。ただ、破壊しようとしても天罰が下るとかそういうわけではないらしい。学生生活や社会生活を考慮してかそのリストバンドを付けた僕を含める６人の人々、その思い出すべき大事な人以外には見えない。まあアクセサリーとはいえど不要物だからだろう。

このリストバンドを付けた瞬間に僕を含め６人（以下、僕たち）の大事な人々に関する記憶は消えてしまう。そのためその大事な人のおかげで携わった能力などの例外を除けば普通の記憶を保っている。現に僕は自分の名前や年齢、今まで学校で勉強して蓄えた知識もおぼえている。その大事な人の情報に関するもの、たとえばメールアドレスや手紙などはあらかじめグロンが遠隔操作するなり勝手に不法侵入して奪い、どこかに保存しているらしい。

大事な人についてだがこの人々にはもちろんリストバンドはついていない。ただ、僕たちとははるか遠くに住んでいるらしい（場合によっては海外に、ということもあり得るとのこと）僕たちの大事な人は僕たちのことを次第に心配して情報を集めるようになる。要するに僕たちはその大事な人の記憶を思い出せないまま探すのに対してその大事な人は僕たちの記憶を保ったまま探すことになる。お互いかなり信頼している中なので諦めるということはないとのこと。グロンについては全く不明である。わかっていることは科学者であり落書きが好きなことしかこの取扱説明書には書かれていない。

そして僕は最後のページ「思い出す方法」までたどり着いたのである。

思い出の取り戻し方

「さて、ここからはみんなが楽しみにしていた（僕にとってはリストバンドを気にいってくれないって解釈になるからから楽しみじゃないんだけれど）君たちの大事な人を思い出す方法を教えるよ。それはつまり、大事な人との思い出を探すんだ。え？何が何だかわからないって？まあそうだろうね。だってこの広い世界で暗中模索しても無駄だからね。だから僕はいたるところにヒントをまきました。家の中、家の外君の身の回りにね。そのパーツを集めていくことによってどんどん大事な人との距離は縮まっていくのだ。一つ集めたからと言ってすべて思い出すわけではないよ。それはすでに操作済みだからね。もちろんこれには運があるんだよ。相手の方が君を見つけるパターンだってある。その場合はめでたくハッピーエンドなわけだけれども（僕にとっては複雑な感じだね）リストバンドは消失してその人の記憶を思い出すわけだ。あーあ、こんなことがないように祈るよ。楽しくないからね。でね、これを途中まで読んで家の中を何度も何度も探しているそこの君！無駄だからやめておきなよ。パーツはすごく細かいところまで見ないとだめだからね。もしかしたら君の家ごと弾き散らかすかもしれないからね。ああ、ちなみにきみたちの家族や友人にも記憶は操作したからね、といってもその大事な人に関する記憶だけだけれども。簡単に思い出されちゃ困るもの。というわけで検討を祈るよ、え？わからない？ここから先は自分で考えなくちゃね。だって正直飽きちゃったんだもん。この説明書作るの」

全く意味が分からないまま、僕の思い出さがしはスタートする。

やばいな、もう深夜だ。明日は学校だし寝るとするか。

学校にて、高峰の心の中。

プログラマーとはいえど僕はプログラミング学校を卒業していない。なぜなら学校を卒業するという前提でプログラマーという仕事をやらせてもらっている身だからだ。
卒業はできる自身はある。おさないころからプログラミングに関する知識は皆よりもずば抜けていた。小学校の時はもうすでにウェブサイトを構築できるほどの頭脳を持っていた。中学、高校とその才能は認められ、プログラミング学校のプロ育成学校、「ＩＩＴＳ」に今通っているわけだ。飛び級がないのでもちろん１８－２２歳までの４年間通い続けることになる。が、みんなとは違い僕だけ特別視されているようで仕事をすることを許されているわけだ。というのもほかの人々は２－３年勉強してこないとついてこれない内容を僕は軽々と１週間足らずで理解してしまったからだ。
もちろん校長やほかの先生ははぼくのことをブランド品としか扱ってないため辞めさせまいと必死である。
何度も退学届けを出したのだがうやむやにされて終わり。そのうち僕もどうでもよくなってしまい、この学校にずるずる約2年間もい続けることになる。
そして気が付いたらこの卒業ということが絶対条件となってしまっていた。取扱説明書といい訳が分からないことばかりだ。
ここまででわかることはもちろん家族プログラミングの先生は大事な人ではないということ、それよりも大事な人が存在することだ。
だから今でもプログラミング能力は健在だし家にも家族がいる。
ただ・・・記憶が少なからず改ざんされているということは・・・うーん・・・。
「・・・たかみねさーん！たかみねさーん？？？」
誰かが呼ぶ声ではっとした。

学校にて、高峰の心の中2

「たかみねさーん、こ、このプリントを受け取って・・・うわっ」
僕の机の前で思いっきり躓いて顔を僕の机にダイブさせた少年、目黒祐樹は
配るはずのプリントをぶちまけ、僕の机と一緒に倒れたまま動かなかった。
と思うといきなり飛び起き、「す、すみませんすみません」と僕の机を直し、プリントを整理しなおすと僕の一枚だけを机の上に置いてそそくさとほかの机にもプリントを配り始めた、がどれだけドジなんだろう。何回も躓いては机を倒しの連続だった。ほかの人はもちろん迷惑していた。
「うわっまたドジが何かやらかしている」
「気持ち悪ーい」
「だれーあの子にプリント配らせたの」
「最悪?」
彼はそのドジがたたってかみんなから嫌われていた。
だからと言って僕は何もしなかった。僕も正直いってあまり彼のことが好きではなかったし。
彼がドジすることを分かって机からすぐさま離れたのが彼が机の前で僕を巻き込まなかったというネタばらしだ。
僕も正直言って彼のことは何も知らない。
みんなもそうだ。彼が過去にやってきたことを学校のサイトにハッキングしてつないで彼を知ろうとした。しかしエラーばかりが出て不明なことばかりだ。
まあそれはさておき、ようやく彼はプリントを配り終えたようだ。
彼は恐る恐る自分の席座ってほっとした様子である。
そのとき、僕は妙なことに気付いた。
彼の左手首に青いリストバンドがつけられていたという事実を。

僕ははびっくりした。
なぜならこんなにも早く、そしてあっけなく別のリストバンドを付けた人間に出くわすとは思っていなかったからだ。
目黒は確かにドジだが校則を破るような問題児ではない。
その様な奴がリストバンドを急につけてくるなんてありえないし、彼は人が思っていることに対してあまりにも無頓着なのでいじめでリストカットなんてこともないと思う。
「たかみねさん？僕の顔に何かついています？」
はっとすると僕は目黒のことをずっと見つめていたようだ。
「いや、なんでもねえよ、それより早くそのプリント配っちまえよ」
「わっわかりました」
目黒は集めなおしたプリントをみんなに配り始めた。
嫌そうな顔をしながらも受け取るみんな。
しかし危なかったな、ポケットに手を突っ込んでたからいいものの目黒ならたぶん「あー！たかみねさんもリストバンド付けてる！仲間だねー！」と叫びそうだから一応危険視はしておいたのだが。
しかしばれるのも時間の問題だから
一応さっさとばらしちゃおう
彼に見つかる前に・・・
まあでも目黒にばれたところでこのリストバンドは見えないのだから幻覚とでも思われるだろう。
その辺は何とかごまかしておくか。
ばれたらの話だけど

屋上　目黒との会話

そうと決まったらすぐ行動ということで

「は、はい！え？屋上ですか？いいい、一緒に行こうって屋上で僕に告白ってシチュエーションってわけではないですよね？？ですよね？あーどうしよう、でも男ではなく女性の方と付き合いたいし。。。」とぶつくさつぶやいている目黒を連れ出し屋上へ。

「目黒。」

「は、はい！！　もう心の準備はできておりますぅっ」

「お前何か勘違いしてないか？」

「あ、あの、残念ながら僕はあなたとお付き合いすることが出来ません！」

「そうじゃねえよ！おまえ気づかないのか？この手首のリストバンドのことを！」

僕は目黒にリストバンドのついている手首を見せる。

彼は

「そのリストバンドがどうかしたんですか？まさか不要物ですね！先生に行っちゃいますよ！校則違反です！早く取り外してください！」

「じゃあなぜお前もリストバンドをつけているんだ？」

目黒はハッとすると「ああ、ええと、これはですねえ」としどろもどろになる。そして

「あなたにも見えるんですか？」

「ああ、見えるぞ」

やっと会話がつながった

屋上　目黒との会話2

「ということはそのリストバンドが入った封筒が目黒のところに送られて来たんだな？」

「リストバンドを買ったことは覚えているんです。その宛先もグロンという方からで封筒もまさに高峰さんが言う通りの分厚さでした。そのままつけた瞬間に何かふわっとして…そのたかみねさんの言う通り記憶が欠けた状態になってしまったんです。その1時間後くらいに郵便が来て例の封筒が届いたんです。」

目黒は淡々と話した。

「僕はこれが悪戯ではないことを確信したんです。なぜなら本当に記憶が欠けたような感じがするからです。たぶん僕たちを含めた6人全員がそのことを思っていることだと思います。」

「ああ、僕もこれは冗談とかいたずらってレベルじゃないと思う。その通りだ。何かが思い出せない。その大事な人ととの記憶だと思うが…

手がかりもなしにさて、どう探すかということになる。

それをこれから考えていこうかなと。そのためにお前も協力しろ。僕一人だけじゃ到底無理だ。そしてほかの4人も探しに行くぞ。同じ町にいるはずだ。」

目黒は

「そうですね、共同前線というやつですね！やりましょう！やるんですよ！そしてグロンの鼻っ柱をたたき折ってやるんです！」

展開が速いがそういうことになった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8885cj/

思い出さがし

2015年2月15日10時16分発行